チーム☆森鴎外

ぽち。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
チーム☆森鴎外

【Ｎコード】
Ｎ５０６４Ａ

【作者名】
ぽち。

【あらすじ】
学校の平和を守るため結成された部活動、それが『チーム☆森鴎外』。日々人助けの為に奮闘する部員、春日小森と櫻外啓介の日常を描いたゆるい雰囲気の学園コメディーです。

プロローグ

私立巣束高校は、生徒の自主性を尊重する事に重きを置いた学校である。
いわゆる自由な校風ってやつだ。
行動の責任は全て自分で。その代わりにかなりの自由が許されていた。
幸いにもハメを外しすぎる生徒は少なく、『自由』の矛先は主に部活動へと向けられた。
部の設立に制限がないのをいいことに、この学校では定番のものからよくわからないものまで、様々な部が存在する。

そんな多数ある部活の中の一つ、『チーム☆森鴎外』（通称：森部）
春日小森と櫻外啓介の2人が立ち上げたこの怪しげな部のモットーは、人助け。
学園の平和を守る為、『チーム☆森鴎外』は日々活動に励んでいる。

……学園の平和が、彼らのお陰かどうかはともかく。

姉さん、大変なことになりました（上）

「……森部やめるかなぁ」

昼。

アホみたいにでかいおにぎりと格闘していた小森の耳に入ったのは、相棒のこんな呟きだった。

「ななな何つった今！？」

「うおっ、やめろよ！んな乱暴にしたら、俺のブルガリアヨーグルトが悲劇の最期を迎えるじゃねーか！」

いきなり掴みかかってきた小森を相棒こと啓介は、心底ウザそうにはねのける。

只今マイブームのヨーグルト。このバカのせいで台無しにされてはかなわない。

「ヨーグルトなんぞどうでもいい！それより今、森部やめようとか言わなかったか？！」

「言った。」

他人の独り言聞いて一人で勝手に盛り上がってんじゃねぇよ、と思いつつ啓介はさらりと答える。

「ＮＯ！！物語冒頭から不吉な事いってんじゃねー！」

「あ？物語って何の話だよ……まぁそれは置いといて、だ。そろそろお前とも話し合おうと思ってたんだけど」

「な、何だよ」

珍しく真剣な眼差しの啓介を前に、思わず姿勢を正す小森。

「そのタラコにぎりくれ」

真剣に見てたのはおにぎりかよ！！

真面目な話の最中におにぎりかよ！とかイチゴヨーグルトとおにぎり一緒に食べるってありえなくね？とか色々ツッコみたいのをグッっとこらえて、小森は素直におにぎりを渡す。
啓介のマイペースっぷりは今に始まった事ではない。これくらいの事でツッコミ入れるなんて時間の無駄だ。
春日家自慢の特大おにぎり（※母親が不器用でこの大きさしか作れない）を嬉しそうに食べること４分半、再び――先ほどより３割減だが――真剣な顔をした啓介に、小森はやはり先ほどの３割減姿勢を正した状態で聞きモードに入った。
「いや、お前と話し合おうと思ってたのはおにぎりの交渉じゃなくてだな、」
「わかってる。いいから早く話せ」
「タラコの焼きが甘かったとおばさんに言っ」
「早く話せ」

「……」
「早く！」

「……あんま認めたくないんだけどさ、
森部って
存在価値無くねぇ？」

森部――『チーム☆森鴎外』は前述の通り、人助けを目的とした部

活動である。
決して文学作家研究サークルではない。小森の名前と啓介の苗字である櫻外を組み合わせた結果、この様な名前に落ち着いただけだ。
所属部員は設立者の二人のみ。部員常時募集中ではあるものの、なかなか入りたいという生徒が居ないのが悲しいかな現実で……。
その理由は明白だ。
漫画やドラマの世界と違い、平凡な学校には事件は早々転がっていない。
学園は至って平和、大活躍出来るような事件にお目にかかれる機会が少ない現状だったり。
加えて部員二人のステータス。
春日小森は、恵まれた運動能力以外は至って普通。しかも変人。
櫻外啓介は、抜群のルックスと手先の器用さ以外は至って普通。しかも変人。
つまり頭脳方面が著しく欠けている。成績が悪い訳ではないものの、普段の行動からはあまり知性は感じられない。変人だし。
そんな二人に難しい事を頼む人もいなく、来る依頼といえば

「春日ー、今度の試合助っ人頼むわ」
「おーい、これ放課後までに資料室に運んどいてくれ」
「櫻外くん、今度の日曜日映画に付き合って☆」

こんな感じ。
ぶっちゃけ良い様に雑務を押し付けられてるだけだ。
設立から半年、正義の味方を夢見て始動された森部は今や完全に雑用部と化していた。
ヒーローマニアの啓介にとって、これは大変嘆かわしい事だろう。
なんせ仕事の大半が、女の子とのデート。
ヒーローらしさ0。
価値を見い出せないのも無理はない。

薄々感づいていた啓介の爆弾発言に、小森は戸惑っていた。
コイツ、俺の頭を何度もかすめては気のせいだと打ち消してきた考えを、こうもあっさりと言いやがって……！！
言葉というのは生きているのだ。口に出せばそれが真実になりうる。
世の中には言ってはいけない言葉があるのだと。
だから今、小森は自分の言葉で真実を紡がねばならない。

「よし、辞めるか　森部」

それはゲーム機のリセットボタンよろしく清々しく、かつ今までの努力を全て無にする虚しさ爆発の素敵な魔法の呪文だった。

姉さん、大変なことになりました（下）

かくして、のっけから『チーム☆森鴎外』をやめることを決意してしまった二人。
しかし腐っても学校所属団体。いくら自由といっても、さすがに「ハイ、やめました」の一言で終了とかいかないだろう。
そこで二人は先生の元に相談に行くことにした。当然顧問なんぞ居ないB級部なので、担任の所へ。

「ちーっす。三上センセーいる？」

あまりお行儀の良くない挨拶で国語科準備室のドアを開けると、三上先生は少々遅い昼食を取っていた。
流しそうめんキットで。
思わずありえねぇー！と叫びそうになったが、相手は教師だと思い出してグッとこらえる。
「先生、それ……」
「あぁ、君たちも一緒にどう？」
「や、遠慮します……っておい啓介！お前も食ってんじゃねぇよ！！」
啓介はいつの間にか麺汁を手にし、先生と共にそうめんを食べている。
コレに疑問を抱かないのか？！一人で流しそうめんだぞ！？つーかどんだけ欠食児童なんだ、お前は！！
呆れる小森を置いてきぼりで、二人は色つきの麺を奪い合って楽しそうにはしゃぐ。
「バカばっかだな、この学校……」
そうめんパーティーが終わるまで待つしかなさそうだった。

「で、俺たち先生に相談があってきたんですけど」
流しそうめんキットを片付けていつもの準備室に戻ったところで、二人はやっと本題に入った。
先生もいつもの穏やかな笑みで、耳を傾けている。
そう、たまに珍妙な行動を取る以外は実にいい先生なのだ。
年こそ生徒たちとあまり変わらない新米だが、人柄の良さで慕われている。
おまけに結構美人なので、こっそりファンがいるとかいないとか。
「実は――部活やめようと思って」
「部活って……森部を？」
「はい」
三上先生は少し考えると、静かな口調で問いかけた。
「満足いく活動は出来たの？」
「え？」
意味を図りかねて、思わず聞き返してしまう。
「春日君と櫻外君が活動に満足して終わらすっていうんなら良いけど、もし本当にやりたかったことをしないままやめちゃうんだったら……先生すごくもったいないと思うのね」
もちろん止める権利は無いけど、と付け足す。
「でも、俺たちは正義のヒーローみたいに人助けがしたかったのに。実際はそんなこと望んでる人なんていないんじゃないかって」
啓介が少々俯きながら言った。多少事実と異なる言い分だが仕方ない。さすがに女の子とデートの日々が嫌です、とは言えないもんな。
「櫻外君、ヒーローって危険にさらされた人達を助けるだけが仕事なのかしら？」
「はい？」
「私はね、それだけじゃないと思う。周りを元気にする存在、それもまた一つのヒーローじゃないのかなぁ。現に二人の周りには笑顔が溢れてるじゃない。やってる仕事があなたたちにとっては雑用で

も、感謝してる人はいっぱいいるの」
不覚にも感動してしまった。
自分たちが無駄だと思っていた事が、必ずしも無駄でないと言って貰った事に。
そんな二人に先生は優しく笑う。
「貴方達は立派なヒーローよ。部活、まだ続けてくれるわよね？」

「先生……」
「俺たち、もう少し頑張ってみます！」

ああ良かった！と三上先生は殊更にっこり笑うと、一束のプリントを取り出した。

「じゃあこれ、明日までにコピー５０部お願いね」

コピー機の前に立ちながら、二人はただ静かに与えられた任務をこなしていく。
「なぁ、俺たちって……」
「いい、それ以上言うな。落ち込むから」
コピーしたプリントが、やけに重く感じるのが悲しい。
「でも……よく考えれば無茶苦茶な理論で言いくるめるなんて、さすがは国語教師だよな」
「うん……」

とりあえず『チーム☆森鴎外』を解散するのは、あの担任に負けない口上を身につけてからだと思った二人であった。

姉さん、平和な午後の一コマです

小森と啓介、そして担任以外誰も知らない廃部騒動は無事鎮火し、『チーム☆森鴎外』は何事も無かったかのように普段通り活動していた。
相変わらずどうでもいい雑用に追われる毎日だったが、もうそれも運命なのかもしれないと半ば諦めモードで。
うん、人々に従事する青春も良いかもね！なんて一般男子高校生としてはいささか可哀想な自己犠牲愛が芽生えてきた二人が幸せかどうかはともかく、日々は毎日単調に流れていく。

「あ～眠ぃ……」
欠伸をかみ殺し、小森は体を大きく伸ばした。
その横では啓介が心地よい風に吹かれ、静かに体を休めている。
昼休みの騒がしさも静まり、辺りにはまったりした空気が漂う。
只今授業5時間目。
そして二人がいるのは当然教室……ではなく校庭の片隅にあるプール裏の芝生――ようするにサボリである。
この場所は二人のお気に入りの場所だ。日なた日陰両完備の上に人に見つかりにくい穴場スポットで、ゆっくり羽を伸ばしたい時はここで過ごす事にしている。
多少狭いものの、それもまた隠れ家みたいで良い感じ。

今日は特に疲れた。
昼休み返上で女生徒がなくしたという財布を捜すのに協力していたからだ。
結局彼女の家族に電話によってもたらされた報告――家に忘れていたという最悪のパターンで事は幕を降ろした。それが授業開始5分前の事。

昼飯も食わずに勉強が出来るかぁ！という啓介の意見に小森が賛同し、現在に至る。
泣く子も黙るイケメンのくせに、どこまでも食欲で動く男――それが櫻外啓介１６歳。

「小森ー、パンとパンとパン、今はどれの気分？」
「あ？全部選択肢一緒じゃねーか」
つーか俺たち、つい先ほど昼食食べ終わったばっかりじゃなかったっけ？
相棒の燃費の悪さ、というか消化の早さにいささか呆れる小森を尻目に、啓介はカバンからパンを取り出していた。
「違ぇよ。ちょっと省略したけど、ジャムパンとメロンパンとカスタード餡子カレーパン」
「……そこ、肝心なとこ省略しないように」
とりあえずあからさまに怪しい三番目のパンだけは徹底スルーで。
小森は二つを見比べて、ジャムパンを選択した。
「んじゃあジャムパン」
「だよなぁ。そうくると思った」
何が「だよな」なのかは謎だが。てっきり手渡されると思ったジャムパンは、小森の手に渡ることなく啓介の口へと運ばれていった。
「おいコラ！俺に選ばしといて自分で食うのかよ……！」
「まぁまぁ。親友と今の気分を分かち合おうとした健気な俺心を察してクダサイ」
「察したくもねぇーー！！」
「まぁまぁ。コレやるから落ち着けって。世の中ギブアンドテイク、求めるだけじゃ駄目だよね」
「ちょっ……！これ！？」
啓介が笑顔で差し出したのは、言わずもがなカスタード餡子カレーパン。
ここで小森は気づく。

こいつ、最初からこの愚かパンを俺に食わす気だったな！ジャムとメロンはフェイクかよ！
つまり最初の選択でカスタード餡子カレーパンを選べば素直に渡し、選ばなくてもこうして押し付ける魂胆だったようだ。
「因みに俺手作り」
「当たり前だ！！こんなもん売っててたまるかぁー！！」
手先の器用さをこんな下らないことで披露するアホな男――それが櫻外啓介１６歳。
そうこうしている内にも啓介は、惚れ惚れするような爽やかスマイルで劇物（カスタード餡子カレーパン）を無理やり食べさせようとしている。
「おわっ！ちょ、待て！察します心中お察ししますから……！！それを近づけるのだけはやめ…！ぎゃあああ……！！」

今、春日小森が切実に欲しい物。
愛のエプ〇ンに出てくる、愛のバケツ（※）

――姉さん、僕はもう駄目です……

※）様するに、食うに耐えない食べ物を吐き出すためのバケツ缶。

姉さん、小さな青春です

今日の気分は最悪だ。

いつになく元気ない足取りで、小森は教室へ向かっている。
胃が痛い。
日課としているランニングも今日は出来なかった。
朝飯も食べられなかった。昨日の夕飯も食べてないのに。
ぶっちゃけ体中から駄目オーラでてます、みたいな。
体調不良の原因は明白――昨日親友がやらかしてくれた、くだらない悪戯だ。

（もう、アイツの作った食べ物は絶対口にしねぇ……）

そう固く決意するが、所詮は運動神経だけがとりえの単細胞。また騙されるのも時間の問題である。

「はよーっす」
教室に入ると真っ直ぐに席に着く。いつもなら教師が来るギリギリまで友人と戯れているのだが、今日はおとなしくしていよう。とにかく、静かに過ごしたい。
机に突っ伏して寝ていると、啓介がやってきて前の席に座った。
「よ！絶不調だな、小森」
「……てめぇ。誰のせいだと思ってる」
「おぉ、不機嫌だこと」
啓介は外国人がするように大きく肩をすくめると、小さな紙包みを小森に寄越す。
「？何、これ」
「正露丸とキャベジンのまごころギフトでございます」

「中途半端な優しさが、何かムカツク……」
全くの無関心ならば、それはそれで余計ムカツクのだが。
まあ、これでも一応啓介なりの誠意なのだろう。小森が受取ろうとしたその時、
「おっはよー！」
とバカ明るい声が聞こえると同時に背中に衝撃が走った。
「いってぇー！！」
勢いづいて机に頭をぶつけたことで、二次災害勃発。
背中と、振動の伝わった胃（絶賛大弱り中）と、額。踏んだり蹴ったりだ。
漫画とかでよくやる鞄で人の背中を叩くの、あれは良くない。痛いからホント！
小森の背中を盛大にぶっ叩いてくれた犯人は、振り向かずともわかっている。
二人とよくつるんでいる友人、鮎川智希だ。
無駄に爽やかで、常に高いテンション。
啓介とは違う意味で一緒にいると疲れる、小森の悩みの種その２である。
「あれー、コモちん何で胃おさえてんの？胃ガン？」
「お前はぁ～！笑顔でそういうブラックな事言うんじゃねぇ！胃が痛いところにお前が追い討ち掛けてくれたんだよっ！」
「うへぇ、マジで胃ガンか？！ゴメンね寿命縮めて」
「……も、いい」
そんなやりとりを見て啓介は肩を震わせて笑いを堪えている。
智希の言動は、啓介のツボに入りやすい。

ふと、智希の後ろに見知らぬ女の子が居ることに気づく。
「サトキ、その後ろの……」
「っと、そうそう。コモちんに訪ね人」
「おい、そういうことは早く言えよ！」

小森と目が合うとにっこり微笑んで会釈をする少女。
かなり可愛い子だ。……が、覚えが無い。
「誰、誰？コモちんの彼女？俺と啓クンの美形ツートップ差し置いてやるじゃーん」
面白そうに耳打ちしてくる智希はとりあえずシカト。
どこで会ったんだっけと考えを巡らせていると、彼女が口を開いた。
「あの、昨日はありがとうございました」
「ん？昨日？」
「はい、財布を……」
「ああ！あん時の！！」
そこまで言われ、小森はやっと思い出す。昨日昼休み返上で探していた財布の落とし主だ。
その時は探すのに必死で、依頼主の顔をロクに見ていなかった。
「お前、今頃気づいたのかよ」
「啓介。お前もな」
相変わらず、頭の中身はお互い様な二人である。
「本当、昨日はすいませんでした。一生懸命探してくれたのに家にあったなんて、とんだ大ボケですよね」
確かに。その時はとんだおマヌケさんだと思ったが、こうして可愛らしい姿を見ると　それすら可愛い茶目っ気に思えるから不思議だ。
というか、ただ単に現金なだけなのだが。
「それで――迷惑かけたお詫びに、春日君と櫻外君に差し入れを、と思ってですね」
大したものじゃないんですが、と前置きしてから
鞄から差し入れを取り出す。
それは、綺麗にラッピングされたクッキーだった。
「うわぁ美味そう～」
「すげー美味そう」
似たりよったりの感想でハモる二人。
「良いの？こんな大層なモンもらっちゃって」

「もちろん！手作りなんで口に合うかわからないんですが」
すげー、これが手作り！
小森は密かに感動する。
店で売ってる物に引けを取らない程の出来栄えの上に、可愛い女の子の手作りなのだ。
あぁ、ハンドメイド万歳。
昨日啓介にされた仕打ちはもう空の彼方である。
「じゃあ」
「遠慮なく」
「頂きまーーす！」

「あ！！」

当の二人をさしおいて、智希がすばやく手を伸ばしクッキーを口に入れる。
「おぉっ！激ウマ！！」
「てめー智希っ！いつの間に包装解いたんだ！なんだよ、その神業！！！」
「ツッコミどころはそこかよ」
三人のコントの様な会話に笑っていた少女は、授業の予礼を聞くと
「では、」
と教室を去ろうとした。
「あ！良かったら名前……」
「あ、言ってませんでしたね。サヤカです、深山紗香。また迷惑じゃなければ、差し入れ持ってきますね」
小森君、胃　お大事に。
そういって微笑むと彼女はドアの外に消えていった。

「さやかちゃん、かぁ……」
そういや胃、痛かったんだっけ。

さっきまで重かった胃が、少し軽くなった気がした。

「いやぁ」

「青春ですなぁ」

少し顔の赤い小森の後ろで、ニヤニヤと笑う啓介と智希。
小森はすばやくプリントを丸めると、プロ顔負けの剛速球で啓介と智希の頭に打ちつけた。
運動の申し子なめんな！！

――とりあえずクッキー、啓介の分も食ってやる。絶対。

姉さん、青春の裏側です

――一目惚れしました。

一目合ったその日から、恋の花咲く時もある……そんなバカな話があるかと思っていたけど、事実は小説よりも奇なりとはよく言ったものだ。
彼女は美しかった。ふわりと揺れる長い髪や、真珠の様に白い肌、そして花のように可憐な笑顔。
少ないボキャブラリーでは到底表現することが出来ない。
ともかく俺は、出会ったばかりの彼女に心奪われ……

「……って勝手なナレーション入れてんじゃねぇー！！」
「痛い痛いいたいいたたた痛いって！コモちん、ギブギブ！！」
智希の降伏は受理されず、小森は容赦なく拳でこめかみをグリグリと痛めつける。
決して筋肉質ではないのに、さすがは運動の申し子。ものすごい馬鹿力である。
「啓クーン　見てないで助けてー！」
「ナレーションの出来がイマイチだったからパス」
「ひっでぇー！！！」
仲間に見捨てられた智希は、その後3分間制裁を受けたのだった。

「俺はさー、ただ単に不器用なコモちんの初恋を応援したげようと思っただけなんよ」
ひどいよなーと痛むこめかみをさすりながら、智希はしれっと言う。
「だーれが初恋だ！俺だって過去に恋愛くらいしたわーっ！」
「わわわ、ゲンコツ勘弁！調子こいてすいません……！でもさぁ、サヤカちゃん可愛かったよねー。コモちん気に入ってたみたいじゃ

ん？」
「まぁ、確かに可愛くて良い子だったし知り合えて嬉しいとは思うけど、別にお前の期待してる展開では無いな」
何を一人で盛り上がってるんだか、と小森はため息をつく。
そりゃ、青春真っ盛りのお年頃だもの。可愛い女の子に手作り贈り物をされて悪い気はしないし、（小森的には）そんなに頻繁にある経験でもないから照れもする。
でも、名前しか知らない子なのだ。そう漫画みたいな展開にはならないだろう。
ヒーローの存在意義を通して変に現実を知ってしまった彼は、ひどく現実主義である。
「ちぇっ。ロマンのない男だなぁー」
智希は心底つまらなさそうだ。
「脳みそフワフワのお前と一緒にすんな。……つーか随分大人しいな啓介」
「うん。レモンの隠し味がよく効いてるからね」
「はぁ？何言ってんのお前……って、ああっ！？何クッキー一人で食いまくってんだよ！！」
先ほどから会話に絡んでこなかった啓介は、クッキーを食すのに夢中だったらしい。
見れば九割は片付けられている。
「あああ～！俺のクッキーがぁぁ！」
「目の前に食べ物がある限り全力を尽くす、それが俺」
「変にかっこよく言ってんじゃねぇーー！」
お菓子を囲んで騒ぐバカ二人を、もう一人のバカは苦笑いしながら眺めていた。
「ホントにロマンがないなぁ……」
――色気より食い気、チーム☆森鴎外の明日はどっちだ！？

「ってか小森、胃は？」
「美少女と美味しそうなお菓子みたら治った」
バカは本当にミラクルである。

姉さん、唐突ですいません

時は昼休み。

入谷七海は呆れていた。
いつもバカ全開のあの男が、今日は何故か大人しい。
いや、正確には大人しいと思いきや騒がしくなり、また大人しくなったのだが。
身体の具合でも良く無いのだろうかと、少しでも心配した自分が馬鹿だった。
あの男――春日小森は、たかが食べ物を食われただけで意気消沈していたのだ。

「何そんな事で落ち込んでんのよ、うざってぇな」
「うっせぇ！お前にはわかんねーだろ、あのクッキーの素晴らしさが！」
「わかんねーよ」
バカだ、こいつは。今更ながら再認識だ。
横で智希がケラケラ笑っている。
「コモちん、段々啓クンに似てきたよなー！主に食い意地とか」
「黙れ！元はと言えばお前がくだらねー事言ってるから悪いんだろーが！」
明らかに八当たりである。仮に彼らが会話に集中していなくとも、啓介はクッキーを食べ尽していただろう。
「ま、ま。そんなにおなごの手作り菓子が食いたいならさ、入谷に頼めばいーじゃん？一応美少女に属する生き物なんだし」
「誰が……」
「はぁ？！バカ言ってんじゃねぇ！てめーが女装して作れよ、このエセジャニーズが！」

反論しようとした小森の言葉は、七海にかき消されてしまった。
……何倍も酷い言葉で。
七海も紗香同様、人目を惹く美少女ではあるが、如何せん口が悪いのが難点だ。
とりわけ、何故か敵対している智希への対応は容赦ない。出席番号順で近い位置にいる二人は何かと接点が多いのだが、その度に（七海が一方的に）険悪なムードだったりする。
今も（七海が一方的に）諍いが勃発している。
二人に何があったのかは、小森たちも知らない。
甘いルックスと明るい性格――まぁ明るいというよりバカなんだが――で女子にモテる智希にとってはある意味新鮮な反応で、本人もある意味楽しんでいるようだ。
あくまで“ある意味”であって、たまに本気でヘコんでるけれども。
とりあえず先に進まないので助け舟を出す事にした。
「七海よー、お前わざわざ智希いじりに来たわけ？」
「バッカ！ちげーよ。私は櫻外君に話があんの。このバカはどうでもいいの」
「啓介に？」
「そ。明日の事でちょっとね」
「明日？」
首を傾げる小森を見て、これまた首を傾げる啓介と七海。
「あれ？話通ってない？」
「あー言い忘れてた」
ゴメン、と表面上の謝罪をして、啓介は言葉を続ける。
「明日、いつもの如く森部へ依頼入ってるって言ったじゃん？」
「んー、聞いたような気がする」
「依頼主、私」
「あー、そういう事かー……って、えぇ！？マジで？」
「ウソついてどーすんだよ。放課後になるとバタバタするだろうから、こうして昼休みの間に話し合いしとこうと思って」

一応部活動の一環と言う事もあって、啓介にデートを依頼する時は小森も同伴で詳細を決めることになっている。
何しろ変人とはいえ啓介はモテる。予定がブッキングでもしようものなら、醜い争いに発展しかねないからだ。
曖昧に生きている啓介に任せておくのは心配なので、デートの日程から詳細――主な事務的内容は小森が決めることにしている。全く、気分はマネージャーみたいなものだ。
「ん？ちょっと待て。今何つった？」
「え？どの辺？」
「今って、……もしかして昼休み？」
とんだ大ボケ発言を聞いて、一同が呆れ顔になる。
「もしかしなくても昼休みだけど」
「コモちん、授業受けた記憶すらねーのか。ヒデェ」
「へこみすぎなんだよ、バーカ」
大人しいと思ったら、思考まで遮断していた模様。

「やっべぇぇぇ！！！大事な用事忘れてた……！！！」

それぞれの発言はもう耳に入っていない。勢いよく椅子から飛び上がると、ダッシュでドアに向かって行った。
「おい小森！こっちは……」
「いい！七海なら俺いなくてもいいから！とりあえず適当に決めとけ！」
思いっきり無責任な発言をすると、小森は自慢の俊足で教室を出ていく。
残された三人は状況がわからず、ただポカンとドアの方向を見つめていた。

「何でしょうかね　あれは……」
「さぁ……」

さて、小森がたどり着いた場所――それは野球部の部室だった。
コホンとひとつ咳払いをすると、ドアをノックする。
「一年F組の春日小森です。失礼しまーす」
ドアを開けると、すでに到着していた部員たちが机を囲んでいた。
同学年の部員達はホッとした表情を見せるが、上級生たちの目はあまり友好的ではない。
少々緊迫感のある空間だ。
「すいません。遅くなりました」
待たせた非礼を詫び頭を下げると、勧められたままに席に着く。
「春日ー、待ってたよ。もしかしたら来ないかと思ったじゃん」
隣に座っている同じ一年の部員が、こっそり耳打ちする。
「わりぃ、ちょっとヤボ用で遅くなった」
実際はボーッとしてて昼休みに気づかなかっただけなんだけど。さすがにこの雰囲気では言えないので、心の中だけで謝罪することに。

小森が席に着いたのを確認すると、部長らしき人間が口を開いた。
「さて。森部も来たことだし、ミーティングを始めようか。春日、話は聞いてるな」
「あ、はい。だいたいですけど」
明日の試合の代理ピッチャー、それが野球部から受けた依頼だった。
正規レギュラーの3年がそろって怪我をし、代わりを満足に勤められる部員が居ないから。そう聞いていた。
なんでもピッチャーの層が薄い上に、二学年が極端に少ない部なので一年で補わなければいけないらしい。
ただ、助っ人で来たのにあまり歓迎されていないのは、依頼主が一年の部員たち――どうやら上の学年に話を通したのは事後承諾だったからしい。
色々な運動部の手助けをしているので定評はあるが、所詮は片手間でスポーツをやっている奴

というイメージを拭えない助っ人稼業。こういう硬い部活ではあまり良い顔されないのは分かっていたのだが。
（なーんかやりづれぇなぁ……）
ユルい世界の住人は、この手の空気にめっぽう弱い。
「俺はコイツにピッチャーを任せるのは反対だ」
ほーらきたきた、反対派。見れば二、三年の半数は頷いている。
「でも、俺たちなんかよりよっぽど春日のが……」
一年がそうフォローしてくれるが、状況は良くならない。
「お前らは野球部のプライドってのがねーのかよ！こんな他所者にレギュラー譲って！」
「人助け部、なんてお遊びでやってる連中に任せるなんてどうかしてるだろ！」
少々傍観モードだった小森は、この言葉にいささかムッとした。
自分の事を言われるのは（まぁムカツクけど）いいとして、後輩へのこのセリフ。
正論かもしれないけど、試合を優先した彼らの気持ちは考えないのかと。
ただの試合ではないことを聞いていたからこそ、こういう展開を予想しながらも引き受けたのだ。
「いいっすよ。俺もお遊びでない証拠に約束しましょう」

「今回の試合に負けたら、『チーム☆森鴎外』解散します」

――啓介、勝手にすまん。

姉さん、唐突ですいません（後書き）

次は、２ルートに別れます。話の流れは一緒なんですが、小森編と啓介編で。

姉さん、僕らは青空の下……（デート編）（前書き）

啓介ルート。こっちは補足的な話で読み飛ばしＯＫのつもりだったんですが、本筋思いきり絡めてしまいました。
シリアス注意。

姉さん、僕らは青空の下……（デート編）

快晴という言葉がピッタリの天気だ。
絶好の行楽日和、と天気キャスターが太鼓判を押しただけあって、街は人で溢れかえっている。
もう少しマイナーなところで待ち合わせすれば良かったと思いながら、定番の待ち合わせスポットである駅のシンボル像に向かう少女。
そこで待っていたのは、
本日約束をした少年ではなく、彼女の天敵だった。

「てめぇぇ、鮎川！！！なんで此処にいるんだよ！！！」

快晴という言葉がピッタリの天気だ。
絶好の行楽日和、と天気キャスターが太鼓判を押しただけあって、街は人で溢れかえっている。
活気に溢れた街も嫌いではないが、なかなか思うように進めないのは困りものだ。時計を見ると、約束の時間から3分ばかりがオーバーしていた。
もう少し早く家を出れば良かったと思いながら、一人の少年が小走りで駆けていく。

「……バカだろ、お前ら」
待ち合わせ場所に着いた啓介が最初に見たものは、七海にプロレス技をかまされてる智希の姿だった。
「啓クン遅いよー！3分23秒遅刻ー！あいたたたっ！痛いって」
「死ね！くたばれ！臓物千切れろ！」
なんかもう帰っていいですか？
そんな考えが頭をよぎるが、放っておくとマジで智希の臓物が千切

れ兼ねないので止めなければ。
ツッコミ役の小森がいないのが悔やまれる。
「えーと……やめたまえ？」
「なんで疑問系？！」
「つーかひねりが全然ないじゃん！つまんね！」
「やり直し！」
即座にツッコミが入る。結局、面白おかしく止めに入れるまで、２０分あまりダメ出しをされる啓介。
「くそぉ、こういう不条理な事は小森の担当なのに……」
「甘いな啓クン。コモちん不在の今、その役割を担うのは……」
「テレビの前のあなたたちです！！」
「えぇー！そこでオンバト？！！」
君ら十分仲良しじゃん。
「ま、小森の不足は相方である櫻外君が補うのが世の常識ってことね」
最早何をしに来たのかわからなくなりつつある啓介だった。
「小森、離れてみてお前の大切さが良く分かったよ……」
月９ドラマ顔負けのセリフを吐く珍しく殊勝な相方に、今頃小森はくしゃみでもしていることだろう。
いや、悪寒を感じてるかもしれない。

「さて、挨拶代わりに櫻外君も軽く凹ましたことだし、そろそろ行きますか」
「はーい！モス行きたい！俺モスの新メニュー食いたい！」
「お前に主導権ねーだろ」
「あー、別にモスでもいいよ　わたし」
てっきり再度大戦勃発かと思いきや、七海は意外にもあっさりと承諾した。
「た・だ・し！鮎川の奢りでな！」
「Ｎｏｎ！やっぱそーゆーオチですか！」

駅から少し離れたハンバーガーショップに到着し、やっと腰を落ち着ける3人。
宣言通り智希の奢りで、木目調のテーブルには様々な食材で彩られている。
「ひっでぇ……。おめーら頼みすぎだろ」
財布を確認してしょんぼりしつつの呟きは丸無視で。
「ところで、そろそろ聞きたいんだけど――智希は何しにきたんだ？」
ウーロン茶で喉を潤した啓介が尋ねると、智希は少々焦りながら答えた。
「えっと……、ほら、二人で会うっつーからてっきりコモちんの試合応援に行くんだと思って！」
「ふーん」
明らかにとってつけた理由くさいが、よく物事を考えない啓介は気づいていない。七海はそもそも智希が居ること自体がもう不本意なのでどうでもいいらしい。
「ま、来ちゃったもんは仕方ないからいいけどさ。俺ら小森の試合観に行く予定なんぞ立ててなかったんだけど」
「えぇぇぇ！？じゃこれマジデートだったの？」
「そーだよ！てめーが来るからせっかくのデートが台無しじゃねーか！」
そのお邪魔虫の奢りを幸せそうに食べるのはどうよ、とツッコミたくなったが啓介の言葉にさえぎられる。
「で、入谷も。今回の目的は何だ？」
「え？」
不意をつかれ一瞬目を見開くが、すぐにいつもの笑顔に戻る。
「イケメンとデートしたかったって、他の依頼主と同じ理由じゃ納得しない？」
「うん。納得しない」

手厳しいなぁ、と苦笑いを浮かべながら七海は言う。
「別になんか企んでる訳じゃないよ。櫻外くんと遊びたかったのはホント。どんな人かなぁって気になってたから。小森を……」
「初めて本気にさせた相手が、どんな人なのかってね」
「……」
軽い沈黙が訪れた。
「お前……それって……」
「取り方によっちゃあ、恐ろしい事に……」
唖然としてしまった二人に、七海が慌てて付け加える。
「ちょっ、違う違う！別に小森が櫻外くんに恋してるとかそーゆーんじゃないから！」
本人が聞いたらふざけんなと怒り出しそうな勘違いである。
「なんて言うんだろ……小森ってさ、割と冷めたとこない？」
「あー、そういえば体育会系バカのわりには熱くないっていうか」
「なんか客観的なとこあるよねー」
二人がうんうんと頷く。
「でしょ？今は『言われてみれば～』程度だけど、中学の時はもっとアレだったわけ。バカなテンションに隠れて分かりづらいけどアイツね、昔から物事に真剣になれない性格っつーか何かに没頭する事が出来ないんだって」
少々冷めたライスバーガーを一口食べてから、七海は話を続ける。
「ううん、実際は――真剣になるのが怖いのかもしれない」
「怖い？」
啓介が思わず聞き返すと、七海は頷いた。
「ほら、小森って運動系だけはすごいじゃん？あれってホント生まれつきの才能なんだよね。スポーツと名のつくものなら、なんでもこなせる。例え馴染み無いものでも、小森は平然と出来ちゃうの。

……努力なんてしなくてもね」
以前、七海は小森に言った事がある。何でも出来て羨ましい、と。
『こんなの、気持ち悪ィだけだよ』
小森は自嘲気味に笑った。いつもバカやってる奴が、初めてみせる大人びた表情だった。
その時はその意味が分からなかったが、今ならなんとなく分かる気がする。
「……もしかしてコモちんは、自分の運動能力が伸びていく事を恐れてる……ってこと？」
「そ。スポーツに熱中すればするほど、当然力は伸びていく。でも、他人がその何十倍努力しても……周りはその才能に追いつけないんだよ。もう、人より出来る、上手いの次元じゃない。
だから本気で取り組むことなんて出来っこないんじゃないかと思う。それでいつの間にか、自分に制御をつけるクセがついちゃったのね」
先程とはまた違った沈黙が訪れる。
小森の意外な話に、智希と啓介は戸惑っている様だった。
三人が三人とも手持ち無沙汰に、目の前の食べ物をもそもそと口に運んだりしている。

「天才ゆえの孤独ってやつか」

何と無しに啓介が呟くと、他の二人も同意した。
「バカだよねー。運動以外は凡人なのに抑える癖がついちゃったから、何にも夢中になれなかったみたい。
……わたしさ、衝動的に自殺しちゃう人って小森みたいなタイプなんじゃないかなって思うんだ。だから、けっこうヒヤヒヤしてたの」
「……でも、今は違うよね？」
智希の言葉に七海は頷き、啓介の方を見る。
「櫻外くんに会ってから、アイツ変わった。二人で部活やるようになって、生き生きしてる」

啓介は少し首を傾げると、ちょっと困った顔で笑った。
「俺、何にもしてないよ？」
「うん。でもきっと何かやったんだろうね」
そっか。
それだけ呟くと、啓介は再びハンバーガーを食べ始めた。
二人も後に続き、再び静かな食事が繰り広げられる。

「あーあ。思わずしんみりしちゃった」
「小森のせいだな」
「小森のせいだね」
「こりゃ責任取ってもらうしかねぇな」

「行くか、野球場」

姉さん、僕らは青空の下……（デート編）（後書き）

微妙に面白みのない話ですいません。
次は野球編です。

姉さん、僕らは青空の下……（野球編・上）（前書き）

本筋の小森ルート。今回は普通にシリアスです。すいません。

姉さん、僕らは青空の下……（野球編・上）

快晴という言葉がピッタリの天気だ。
絶好の行楽日和、とお天気キャスターが太鼓判を押しただけあって、雲一つない青空が広がる。スポーツにピッタリの気候だ。
そんな中、野球のユニフォームに身を包んだ一人の少年が溜め息を落とす。

（やべぇ、テンション上がんねぇ……）
晴れやかな気候とは裏腹に、小森の心は沈んでいた。
空気が重い。
いっそ昨日の時点で依頼をキャンセルしちゃえば楽だったのに。いつになく弱気な考えが頭を霞める。まぁ今更そんなこと言っても後の祭りだが。
昨日――例のミーティングで、一応先輩たちから試合助っ人の許可は出たものの、一向に関係は修復していない。
ギクシャクした雰囲気を引きずっての試合は、心底骨が折れそうだ。人との溝を感じながらの登板。一番嫌いなことだ。
「……だからスポ根は苦手なんだよ」
小森は昔の事を思い出してまた、溜め息をついた。

『春日と試合してもつまんねーよ』

あれは小学校の頃だろうか。草野球の帰りにそう面と向かって言われたことがあった。
元々ソリが合わなくて諍いの多い相手だったけど、ストレートに言われたその言葉は今でもはっきり覚えてる。
「そんなことないよ」とか「春日のお陰で試合に勝ててるから」と

か、周りは一生懸命フォローしてくれたけれど、逆にそれが的確な指摘である事を知ってしまった。
試合をすれば必ず勝つ。あまりに不平等すぎる自分の存在にはっきりと気づいたのもその時だ。
物心ついた時から運動は好きだったし、どんどん上達していくのが楽しくてのめり込んで行ったけれど、やはり一番は皆と共に楽しむ事。
他の人達に不愉快な思いをさせてまで自分を優先させたいとは思わない。
他人に合わせていかなくては、と思ったその時から小森は全力を出すことをやめた。
孤立するのが怖かったのだ。
周りからはみ出ない程度に、人並みに。それが正しいと思った。
協調性としては間違ってないかもしれないけれど、やはり心から楽しむ事は出来なくて。
野球もバスケもサッカーも、どれも結果は同じで。
結局、大好きだったはずのスポーツは自分を苦しめることになり、いつしかやめてしまった。

――こんな能力、なくなっちまえば良いのに。
なんどそう願った事か……。

「春日、」
不意に声を掛けられ、意識が現実に引き戻される。
振り向くとチームメイトの一人が立っていた。坊主頭の、いかにも野球やってます！な感じの部員が。
キャッチャーであり、この野球部の副部長でもある三年の高平和友。
上級生の中では数少ない、小森に友好的な人物だ。
「大丈夫かー？なんかあんま調子良くなさそうだけど」

「すいません、ちょっと考え事してただけなんで大丈夫っす」
心配そうに眉をハの字に歪める高平に、小森は平静を装って答える。
「ごめんな、変な事になっちゃって。春日は善意で代理に入ってくれたのにな」
高平は少し潜めた声でそうつぶやく。
「いや、俺もなんか生意気な態度とっちゃったんで……」
「引退前最後の試合で、皆ピリピリしてるだけなんだ。あんま気にしないで気楽にやってくれれば良いから」
気楽に、と言われてもそうはいかないだろう。小森は苦笑した。
「高平先輩は……」
「ん？」
「俺なんかがマウンドに上がって嫌じゃないんですか？」
「なんで？」
「なんでって……やる気がないわけじゃないけど、皆より野球にも試合への情熱もない部外者っすよ。雰囲気壊すかもしれないのに」
高平は人の良い笑みを浮かべ、答える。
「俺は、感謝こそすれ嫌だなんて思ってないよ。俺たち三年に花を持たせて引退させてやりたいって思ってる後輩にも、嫌な思いしてでもその願いを聞いてくれたお前にも。それに、」
「それに、何すか？」
「春日も、野球好きだろ？」
「――――――――」
言葉に詰まってしまった小森に、高平は相変わらず穏やかに笑う。
「昨日球を受けたときわかったよ。普段は力調整して抑えてるみたいだけど、ラスト一球本気で投げたやつ……ああいう球投げれるのは野球が好きな奴だけだ」
これでも名キャッチャーなんだから分かるんだよ　これくらい、と

茶化す。
「ま、なんか色々事情があるみたいだけどさ。部外者だって思うなら逆にそれを逆手にとって楽しんじゃえばいいって！責任とか何も考えないで、本気でやるも手抜くもお前次第。だって春日は野球部じゃなくて森部だもんな！」
背中をパシンと叩かれ、緊張していた筋肉が弛緩する。

そうだよ、昔とは違うんじゃん。
今、俺がスポーツと向き合っていけるのは、
『チーム☆森鴎外』だからだ。

「そうさせて頂きます。でも先輩、一つ訂正。俺が好きで仕方ないのは野球じゃなくて」

人助け、です。

一番基本的な事、忘れてた。

「小森って、部活どうすんの？」
4月。入学当初の慌しさも徐々に薄れ新生活に慣れてきた頃、生徒たちの話題は次のステップ――部活動へと移っていく。
小森にそう尋ねてきたのは、学校が始まってすぐ仲良くなった生徒だった。
「んー……部活とかあんま興味ねぇし、考えてないや」
人はどこから情報を仕入れてくるのか。入学して一ヶ月ほどしか経ってないにも関わらず、小森の運動能力の高さは運動部で評判になっていた。
故に色々な部活動から連日アプローチを受けていたのだが、スポー

ツをやることに抵抗を持ってしまった彼自身にしてみれば迷惑な話だった。
「お前運動好きなんじゃねぇの？」
「出来るだけだ。好きと得意は違ぇよ」
訪ねた本人は首を傾げる。
「運動、嫌いなんだ？」
「……というか俺、協調性も向上心もねぇから。部活の輪に入ってくの無理」
こういうと決まって人は「もったいない」とか「試しにやってみればいいじゃん」と言った反応を示す。
この会話も同じように進んでいくのかな、と思ったが、相手は意外な事を口にした。
「じゃ、運動部なんてやめて俺と人助けしよ」
「は？」
「俺、人助けするための部活作ろうと思ってんの。だからお前も人助けだと思って、俺と一緒に人助けしようぜ」
「……ちょっと待て。何がなんだかわからなくなってきた」
突然の提案とややこしい言い回しに、小森は少々混乱する。
「だから、小森は部活ってくくりで運動すんの嫌なんだろ？だったらその無駄に有り余った能力を人様に提供すればいいじゃん」
斬新な考えを披露した友人――櫻外啓介は、そう言い放ちニカッと笑った。
「無駄って……言ってくれんじゃん」
小森もつられて笑った。
「いいよ、やろうぜ。人助け」

――そう、自分にとっていらない能力でしかなかった無駄な運動神経。
これの使い道を示唆してくれたのは啓介と、二人で立ち上げたこの

部活だった。

「よし。じゃ気分切り替えて、肩慣らし行くか！」
「はい！」

ぶぇっくしょい！

元気良く返事をし、グローブを手に取ったところで小森は豪快なくしゃみをした。
「何でこのタイミングでくしゃみ？」
「さぁ……」
せっかく感動的な場面だったのに、間抜けなくしゃみをしてしまうとは。
微かに寒気がしたのは気のせいだろう。

姉さん、僕らは青空の下……（野球編・下）（前書き）

すっかり間が空いてしまいましたが、前回の続きです。

姉さん、僕らは青空の下……（野球編・下）

ズバン！

球場にミットの心地よい音が響く。

（なんかよくわからないうちに）吹っ切れた小森の活躍は凄まじかった。

相手チームに次々と三振を取り、点差はどんどん開いていく。

強豪と言われていた度都留高校の部員たちは、たかが一年のピッチャー相手にアウトを重ねていく事実に悔しそうな顔だ。

相手にはちょっと悪いとは思うが、知ったことか。

今回の依頼は、試合に勝つこと。軽くパフォーマンスとして試合を盛り上げる程度に力は調整するが、こちらのペースでやらせてもらう。

始めは小森の事を良く思っていなかった味方チームの部員たちも、その実力は認めざるをえないようだ。

高平なんかはコントロールの正確さが面白いらしく、様々なバリエーションに富んだサインを出してくる。

（先輩、完全に遊んでんな）

小森は苦笑しながら、彼の指示通りに投げる。

相手の選手をカーブで押さえ、スリーアウト。

満足気な高平のハイタッチに付き合いながら、小森はベンチへと戻っていった。

「よくやってくれてるな、春日」

ベンチに戻った小森に部長がかけた言葉は意外な労いの言葉だった。

この部で春日反対派の筆頭は間違いなくこの人だったから、好意的な言葉に少々驚く。

ベンチの席を詰めたので隣に座る。

部長は小森の方を向かず前を見つめたまま、ポツリと言った。
「部外者のお前に八つ当たりしてすまなかった」
「いえ、」
まったくですね！そう返してやりたい気満々だったが、生憎平和主義者なのでそれは心の中でだけで留めておく。
多分啓介や七海ならば遠慮なく言い放つのだろう。七海に至ってはオプションでもっとキツイ言葉が飛び出しそうな。
智希は……やっぱり言うんだろうな。腹立つくらい爽やかな笑顔で。うわー、俺の周りやな奴らばっかだなオイ！
なんて一人考えてるうちに、再び部長が口を開く。
「悪いとは思ってる。でもな、まだお前の力を借りる事に完全に賛成な訳ではないんだ」
「森部の……というか俺のやり方が気に食いませんか？」
「いや、そうじゃなくてな。一年の部員の事だよ」
カキン！
ボールを打つ小気味良い音が響く。今のは結構良い当たりみたいだ。
「一年連中が、俺たちの為に助っ人を頼んだのは分かってる。でもな、ただ勝ちたいってだけじゃなくて……なんていうんだろうな。俺はこのチームが好きなんだよ。実力とかそういうの関係なしに、この部員たちが」
「つまり、皆でする試合が一番の思い出になる、と」
「そういうことだ」
小森は一呼吸置き、静かに告げた。
「先輩は一年が分かってないと思ってるかもしれませんけど、ちゃんと理解してますよ皆」
「え？」
ずっとグラウンドに目を向けたままだった部長が、小森の方へ向き直る。
「俺ね、今度の試合に勝ってくれとは言われたんですけど、大会で優勝させてくれとは依頼されてないですよ」

「？どういう事だ？」
「これ、単発試合じゃなくて何校かのトーナメント式なんですよね？だから今回勝てば引退ラスト試合って訳じゃない。正規レギュラーで挑んでも勝てるかわからない相手だから、忘れてたかもしれないですけど」
まだ頭の整理がついてない様子の部長に、小森は答え合わせをするように言う。
「つまり俺が依頼されたのは、勝って野球部の寿命を延ばすこと。次の試合までには復帰出来るんでしょ、こちらのエースピッチャーは」
あ、と声にもならない小さな声を出す。どうやら気づいた様だ。
小森は悪戯っぽく笑う。
「正義の味方が涼しい顔して優勝かっさらっちゃうのも良いけど、スポ根の基本は苦楽を共にした仲間と勝ち取る勝利、ですよね」
「だな」
同じ様にやっと笑顔を見せた彼に、内心ホッとする。
一度も笑いもしない部長に実は結構びびってました、なんて絶対言えないが。
ま、まだ終わってはいないけど今回も一件落着かな。
軽やかな気持ちで打席の準備をする。
ワンアウト・塁には2人、次の打者がアウトでも充分いける。
「さて、一丁ホームランでもいってみますか！」
なんか天気崩れまくってきてるけど。

……？
微妙な引っかかりを感じて、小森は後ろで静かに事を見守ってた高平に問いかけた。
「先輩、今日って快晴だって言ってましたよね？」
「あぁ。降水確率は0だって天気予報で言ってたんだけどなぁ」
「それにしてはこの天気……」

「コモちん、やっほー！アイファインセンキューアンジュー？」
小森たちの会話は、ばかでかい能天気な声に遮られる。
よーく知ってる声。言わずもがな奴らだ。
「アンジュー？じゃねぇよ。なんでおめーらがここ居んだよ？！」
「あのバカに私のデート邪魔されたから、小森の試合も邪魔してやろうと思って」
「ロクでもねぇ提案してんじゃねぇー！！」
「頭に響く声に導かれるまま、気がついたら此処にいました」
「病院行けよ、このチーム☆電波塔が！！！」
一通りツッコミを入れると、大げさにため息をつき諭すように言う。
「あのね、君たち。今試合中なの。だから部外者は出てけよ」
「部外者なんて……俺らとコモちんの仲はそんな他人行儀なものじゃないじゃないの！！」
「や、部外者だろ」
あんまり大騒ぎすると俺が部長に怒られるだろーが！やっと和やかになり始めたのに！
そう思いながら小森がベンチに座る部員たちを見ると、明らかに顔色が変わっている。やばい。
「すいません、すぐ追い出しま……」
「春日……お前なんて事してくれたんだぁー！！」
とっさに謝った小森の言葉を遮る様に、部長の大声が飛んできた。
「え？え？部外者入れたのってそんなにマズイの？」
「違う！それも良くないが、そいつだ、そいつ！！」
部長が指を指した先には、智希がいた。
「一年F組鮎川智希！お前運動部に出入りしてるのに、コイツの噂をしらないのか！？」
頭に？マークを浮かべている小森に、部長は畳み掛けるように説明する。
「いいか、春日。お前が仮に運動部のカリスマならば、この男は運

動部の死神！こいつを絶対試合に招いてはいけないというのが運動部の中では暗黙の了解なんだ！鮎川智希が来た試合は必ず、どんなありえない確率であろうとも」
「とも？」

「１００％雨になる」

まさか、と言いかけた小森の言葉はそのまま飲み込むことになる。絶妙のタイミングで、バケツの水をひっくり返したような大雨が降り注いできたからだ。
「うっそー……」
ザザザーという大げさな雨音のＢＧＭの中、部員たちはうなだれる。
「終わった……」

＊

試合が中止になった後、大雨は嘘のように引き、再び快晴の空が広がった。
「くっそー、結局俺がものすごい怒られたじゃねーか……」
「ま、ま。どっちにしろ試合は延期になってレギュラー復活の時間稼ぎが出来たんだから、依頼的にはオッケーだったんでしょ？」
珍しく優しい七海のフォローが痛々しい。
運動部の結束をなめてはいけない。結束して小森に憤慨したエネルギーは、それだけ凄まじいものだったのだ。
「なんか納得いかねぇ……。つか智希！なんでお前はそんな大事なこと言わなかったんだよ！？」
大元の原因である智希はケロリとしている。
「ごっめんねー。俺も初耳だったよ、そんなこと」
反省どころか、新たな自分発見☆とばかりにちょっと楽しそうなのが腹立たしい。

「いやぁ、世の中漫画みたいなことって意外とあるもんなんだねぇ。そういうの、コモちんや啓クンの変人コンビだけかと思ってた」
「変人いうなぁ！！……って啓介、お前なんでずっと黙ってんの？」
「……ハラガヘッテハキソウデス」
「！！片言で吐きそうとか言うな……！」
「よーし、んじゃあ急いでご飯食べに行こ！もちろん、」

「「「小森の奢りで」」」

……こんなオチってあんまりだ。
自分はもしかして不幸の星の元生まれたんじゃないだろうか、そう考え一人落ち込む小森だった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5064a/

チーム☆森鴎外

2010年11月1日03時17分発行